

「絵本を介した前言語段階の母子相互関係」の研究手法

櫻井 美佐子

幼い子の居る家庭で見られる光景の一つに、母子が共に絵本を見ている光景がある。

「読み聞かせ」という言葉があるように、母親は幼い子に絵本を読んで聞かせ、幼い子はその声に耳を傾け、絵を見ている光景である。

この日常的な母子の姿を、相互関係に着目し研究を進めるのが、「絵本を介した前言語段階の母子相互関係」の研究である。本稿は、その研究に用いる方法論である。

1. 背景と目的

母子関係を理解するには、Bowlby の attachment (1969) や Klaus と Kennell の bonding (1982) などの理論があるが、attachment や bonding という結果を知るだけでなく、母子関係が形成される過程の検証は重要である。

関係性を考えるとき、そこには、主体 (subject)¹⁾と主体の関わりという考えが必要である。主体相互の関わりが、いかに作用し、その場面を形作るのか。主体相互が相互の思い (主観)²⁾をいかに読み取るのか。それは、母親と乳幼児という非対称に見える関係においても同じである。

「乳幼児は社会的相互作用に参加する生物学的準備性を備えて、この世界に生まれてくる。また、親も養育における社会的相互作用の準備をしている。」(Emde, 2000) これは、生物学的観点から、人の相互性が、生来、備わったものであるという考えであり、乳幼児と母親は社会的相互作用を準備しているという文脈において、乳幼児と母親は非対称ではないことを意味している。非対称でない相互作用が、どのような形で表れるのか。それを知るためには、互いがどのような関わり方をするかに着目し検証する必要がある。

Erikson (1964) は「最初の相互性は、単なる出発点であり、その後次第に複雑な出会いにぶつかる」とする。つまり、前言語段階の母子相互関係の研究は、

その後の相互関係研究の出発点としての役割を担うものである。

相互関係の過程を知る考え方に、Intersubjectivity という概念がある。これは、主体と主体の相互関係の考え方として、哲学、現象学、物理学など、様々な領域で必要とされる概念であり、精神分析の領域では、臨床理解の重要な概念として在る。また、現在、Intersubjectivity は、間主観性、相互主観性、共同主観性、間主体性、相互主体性などという多様な邦訳があてられ、精神分析的観点、現象学的観点、発達心理学的観点など、それぞれの文脈の中で微妙なニュアンスの違いを示している (鯨岡, 1986 c, 1993 b)。

Trevarthen (1979) は、Intersubjectivity を、「理解を互いに相手に伝え合う活動主体同士の繋がりに言及するものである」とし、「対人的 Interpersonal というより、意図的な意図をもった主体たちが、その精神的、情緒的過程を関係づけ合う」とする。

「絵本を介した前言語段階の母子相互関係」の研究は、母子相互関係の情緒的過程を研究することであるが、乳児が前言語段階の場合、その思い (主観) を読み取る方法に言語化されたものを用いることができない。しかし、言語化されていないとはいえ、乳児の思い (主観) は非言語ではなく、言語の前段階であり、乳児自身の思いを表現していることには違いない。泣いたり、笑ったり等の表情、手足を動かしたり、のけぞったり等の身体の動き、声の抑揚、音調など、乳幼児の情緒表現は乳幼児の「言語」として存在している。(Emde, Sorce, 1983)

したがって、前言語段階の母子相互関係の研究には、母親の思い (主観) を読み取ることとともに、前言語段階の乳幼児の言語、思い (主観) を読み取り、母子間の間主観性を捉えることが必要となる。そこで、本論の目的は、「絵本を介した前言語段階の母子相互関係」を実証するために、その間主観性を捉える方法を述べることである。

2. 母子相互関係研究の間主観的アプローチ

乳幼児の情緒表出は、前言語段階の乳幼児の言語であるが、表出場面の臨床を検証しない限り、その言語を読み取るのは困難である。例えば、手足をバタバタさせるのも、喜んでいるのか、機嫌が悪くむずかっているのか。また、声をあげるのも、機嫌のよい声なのか、不機嫌な声なのか、驚いているのか。これらの情緒を読み取るには、その場に居合わせるか、記録された文脈や映像の流れから解析されなければならない。その情緒が表出されたその場、その時こそが、乳幼児の言語を読み取る機会である。つまり、その情緒が表出された過程、関係性、つまりその間主観性の「読み取り」が重要となる。

同様に、言語化できる母親の情緒表出を読み取る作業も、関係の中での情緒表出である限り、表出場面の臨床を「読み取る」方法が重要となる。

(1) 関与しながらの観察

間主観性を読み取るために、鯨岡 (1986 a, 1986 c, 1989, 1993 a, 1993 b, 1997, 1998, 1999 a, 1999 b, 1999 c) は、関与しながらの観察という方法を取り入れた。

これは、観察現場で透明な存在に徹した客観主義の立場をとらず、被観察者の立場に「成り込み」(相手が現に生きつつあることを、おのれのこととして、つまりおのれを相手に重ね合わせて、相手を生きようとする様態、相手の立場に立つ、共感する) (鯨岡, 1997), その主観を把握することによって、被観察者の間主観性を理解しようとする立場をとる。

また、この「関与しながらの観察」という概念は、Sullivan (1953) によると、「…相手となる個人と一応客観的に接触することを可能にする技術の開発は、実際上不可能である。科学的に観察可能なものは、ある場面におけるその人間の営為、すなわち、何事を語り何事をなすか、である。確実性は劣るが、その人が自分の中で起こっていることを語ってくれるならば、これもまた科学的に観察する事が可能である。われわれが観察の対象とする人間とわれわれがかかわり合っていく対人的な場において〈関与しながらの観察〉を行う、という技術ならば、これは〔われわれの努力によって〕改良進歩させていく事が可能である。… (中略) …観察者が観察される者とかかわってつくる場において観察者と観察される者との間に起こる現象ならば、研究が可能である。」

さらに、乳児の情動研究の持つ前提を、Stern (1985) によって、確認すると「結局のところ、私たちは乳児の心の中にもぐりこめはしないのですから、乳児がどんな体験をしているかなど意味のないことなのかもしれません。しかし、まさにそれこそ、私たちが本当に知りたいし、また知らねばならないことの核心なのです。乳児の体験とはこんなものだろうな、という私たちの想像が、乳児とは一体何者であるかという理解を形作り、それが乳児に関する私たちの作業仮説を作り上げます。」すなわち、前言語段階の乳児の精神生活における研究領域では『推論』の域を完全に脱するわけにはいかず、特に、前言語段階の母子相互関係理解には、その母子間の物語を観察者が「成り込み」読んでいく必要がある。

したがって、「できるだけ自然な形で母子の生活に臨席し観察する」方法は、母子相互関係を見出す方法として、有効であると考えられる。

その上で、一つ一つの事例から考察するのではなく、相互関係の過程を検証する場合には、母子間の環境条件を定めることによって、縦断的に観察できるのではないかと考える。

その環境の一つとして、絵本を介することを本方法では採用する。

絵本は、前言語段階の母子の場合、読める大人、開くことのできる大人、読めない乳幼児、一人で扱いにくい乳幼児という、扱う上で非対称な立場の二者が、一緒に見ることのできる環境である点。

そして、絵本は、特殊な準備や新奇な準備を必要とせず、母親と乳幼児が、日常的に同じ環境を介することができるという点で、継続的に、自然な観察ができるといえるからである。

しかしながら、関与しながらの観察により、母子相互関係を見る鯨岡の研究 (1997, 1998, 1999 c, d) においても、絵本を介した母子相互関係の過程を見た事例は少なく、また、絵本を介した母子相互関係を縦断的に見ているものはない。したがって、本方法による実践は、「絵本を介した母子相互関係の考察—前言語段階の事例研究を通して」(櫻井, 2003) である。

(2) 実践研究における観察の具体的な流れ

被観察乳児 (7組の母子) は、4ヶ月前後、6ヶ月前後、9ヶ月前後、12ヶ月前後 (1歳前後)、15ヶ月前後、18ヶ月前後に行く。それぞれ、およそ2ヶ月～3ヶ月に一度ずつ、1時間ほど、家庭訪問をし、母親と談話しながら、ビデオカメラをセットし、絵本を

赤ちゃんの周りに数冊～10冊程度用意する。そして、観察者が撮影者も兼ね、ビデオカメラ撮影は、一台のみで行う。7組の被観察家庭のうち、観察者が初対面の母親は5人であり、母親の年齢は、20歳台後半～40歳である。

用意した絵本は、日本のブックスタート推奨の絵本、イギリスブックスタートプロジェクト推奨の絵本、その他、布製、木製、日本のボードブック、小型絵本などである³⁾。

観察者は、赤ちゃんやお母さんに声を掛けながら(話し掛けながら、)ビデオカメラを準備する。用意した絵本は、観察現場での状況に準拠しながら、赤ちゃんとお母さんのそばに広げたり、積み上げたりする。

「赤ちゃんと一緒に見たい(読んであげたい)絵本をどうぞ。」と言い、ビデオカメラで、その様子を撮影する。その場の状況に合わせてながら、撮影するので、赤ちゃんの機嫌などにより、実際の撮影時間は、決めない。また、赤ちゃんがビデオカメラを意識している時は、三脚にビデオカメラを置き定点位置から撮影する。その際、観察者はその場に参加しながら観察を続ける。

なお、本観察は、母子の生活の自然な流れを観察することに重要性を置くので、乳児の生活のリズムを崩さない指定された時間に観察し、母子が日頃生活している家庭での様子を、観察者同席で観察する。

以上の手順で、本論は、その場で観察されたことを記述し、その場の流れを読み取ろうとする。それは、乳児が絵本と出会うには、必ず、母親の(年長者の)働きかけが必要で、一つの主体だけでは、相互関係が把握できず、2つの主体(乳児と母親)が、1つの道具(絵本)の関わりを得て、さらに複雑な相互関係の流れになることを予測するからである。そして、観察現場で表出する乳児と母親の生きたコミュニケーションの臨場感—その身体表情の変化、その声のトーン、全体的な雰囲気など—を感受し、把握することにより、絵本を介した母子相互関係を推論・考察していく。

《観察後の流れ》

観察後は、(1)観察場面ビデオを起こしながら、エピソードを記述した後、(2)月齢ごと、個人ごとにビデオを編集し、(3)横断的考察と縦断的考察を進め、(4)それらを総合的に考察していく。

(3) エピソード記述

観察されたエピソードの記述は、観察者によって、目の前で起こった事象の展開を文章で縮約・表現することであり、観察者以外の者も、観察された事象を同様に把握できる研究資料でなければならない。特に、前言語段階の母子相互関係をみる場面は、実際に観察現場で観察されたことを、ビデオ再生の力を借りながら、見たままを縮約・表現していく作業が必要となる。当然、観察臨床の印象が薄れないうちに、記述を進め、ビデオを再生し繰り返し見る事によって、現場で見落としたもの、発見できなかったことを把握する。

「エピソード記述は、生起した出来事をできるだけありのまま、その生き生きした様相において取り上げ、そのく出来事そのものに語らせる」という素朴な発想を土台にしている。」(鯨岡, 1999)が、実際には、観察されたもの全てが、切り取られ記述されるわけではなく、出来事そのものを切り取る時には、観察者(記述者)の問題意識自体が問題となり、一般化できるわけではない。しかし、観察者(記述者)の問題意識、ならびに考察に必要な情報を焦点化できるように切り取って記述していかなければならない。

《エピソード記述後の流れ》

被観察母子の4ヶ月前後、6ヶ月前後、9ヶ月前後、12ヶ月前後(1歳前後)、15ヶ月前後、18ヶ月前後の記述を、横断的に比較・考察する。6ヶ月前後～18ヶ月までの被観察母子一組を縦断的に比較・考察する。横断的観察結果と、縦断的観察結果を統合し、考察、総括する。

(4) 客観性と信頼性

「関与観察した結果をエピソード記述として記述する」、この研究方法には、常に、研究結果の客観性の問題が伴う。関与観察のどの部分を切り取り、エピソードとして記述するのかという点について、関与観察者・記述者としての問題意識が関与した上で、観察・記述するからである。観察記録と本方法でいうエピソード記述の大きな違いは、関与観察したビデオを記述者として見直すということである。

本研究方法の客観性には、自ずと限界がある。数値で測れない人と人との情緒的過程の研究方法であり、前言語段階の母子の相互関係研究であるため、推測の域を完全に出られるわけではなく、その観察結果の完全な反復はありえない研究方法だからである。

例えば、ビデオ撮影した観察データを次の方法で公

開したところ、

ビデオ撮影したもの【エピソード1・2】(各3分前後)を、専門学校生(保育科)36人に2回繰り返して見せる。質問紙には、「2本のビデオには、乳児が同じことを母親に伝えていると思われる箇所があります。どんなことを伝えていると思いますか?」と質問した。

【エピソード1:A児と母親】

積んである絵本の中から、『がたんごとんがたんごとん』の絵本をA児が自分で手に取ると、母親は「それがいいの?」と声をかける。A児は身体をずらしながら、母親の方に投げる感じで母親に差し出す。母親は「がたんごとんがたんごとんするの?」と言いながら絵本を開く。「がたんごとんがたんごとん のせてくださーい のせてくださーい」と母親が読むと、A児は手を絵本に伸ばしページを自分でめくる。次のシーンを母親が「がたんごとんがたんごとん」と読むと、再度A児は自分でページをめくる。次ページでも本を見たり母親の顔を見たりするが、手は絵本を触っている。自分でページをめくりたような動きを見せるが、母親が「りんごさんよ。ほら」と言う頃には、関心がそれてしまう。

【エピソード2:T児と母親】

前回、気に入った様子だった『おおきい ちいさい』という小さな絵本を目ざとく見つけ「だうだあ」(どうぞと聞こえなくも無い)と、母親に差し出す。母親は読み、T児は、一冊全部、気が散ることなく、じっと聞いている。母親は一冊全部聞いたのが初めてなので、「聞いてたね」と言いながら絵本を置くが、T児は、もう一度絵本を取り、「だうだあ」と差し出す。母親は「もう一回読むの?」と、読み始める。母親は、T児の鼻を触ったり、ほおを触ったりしたり、T児の名前を入れたりしながら読む。T児はじっと聞いているが今度は最後までさかず、そばにあった『いないいないばあ』を取り、母親に持っていこうとする。

その結果、36人中34人の学生が、二人の乳児の伝えたい思いを

絵本を読んで欲しい。この絵本をもう一回読んで欲しい。

また、1人の学生が、

絵本を読んで欲しいと、絵本を読むときにバアと母親

が言ったので、もう一度して欲しい」と、読み取っている。

つまり、36人中35人の学生が、二人の乳児の絵本を投げ出す行動と、差し出す行動から、乳児の前言語段階の行動や発声を「絵本を母親に読んで欲しい、絵本に関わる行動をもう一度して欲しい」という思いの表れだと読み取っている。

このように、数的に大量に分析結果が合致したことは、この観察結果の切り取り部分の信頼性が高いことに関連づくと考えられる。しかし、正確な数値とはいえない。分析する母集団、質問紙の質問文、ビデオ全体の切り取り時間など、条件により結果の変化が考えられるからである。また、同場面の関与観察者であるエピソード記述者が大多数存在し、大多数の観察結果が同様で、同様な記述をするとしても、あくまでも数値化できる精度をもつものではないし、一般化できる定義があるわけではない。

すなわち、本方法は、精度の高い客観的数値を求めているわけではなく、前言語段階の母子が可能な限り日常と同じ環境で過ごす時間を観察対象にし、そこから読み取れることを提示する形をとる。本方法で、重要なのは、その観察場面の間主観性を読み取り、そこから、考察することである。

しかしながら、データの捏造や歪曲・独善があってはならず、複数の検証が可能になるよう、観察データの公開を伴うのも本方法である。

3. 実践と課題

(1) 先行観察方法と本観察方法

絵本を介した母子相互関係の先行研究には、大村彰道・荻野美佐子・遠藤利彦・針生悦子・石川有紀子・白佐いずみの「絵本読み場面における母子相互作用(第1・2報)」(1989, 1990)、秋田喜代美・横山真喜子・森田洋子・菅井洋子の「ブックスタート協力家庭の母子相互作用(1)~(4)」(2003)の研究がある。《「絵本読み場面における母子相互作用(第1・2報)」の方法》

○第1報対象:3歳児とその母親13ペアで、出産時に問題のなかった都内在住の第一子とその母親。観察以前から関係があり観察者と母子とのラポールはついていた。

○第2報対象:第1報と同じ母子のうち、1年後に観察可能な11組(4歳児,男児4人,女児7人)

○第1報,第2報の方法:絵本(パイロン・バートン

作てしまゆうすけ訳ほるぶ出版)を児童の家庭で子どもに対して普段どおりに読んでもらい、その場面を観察者の一人がビデオにとり、もう一人が観察記録にとる。家庭への訪問は、3-6日おいて2回行い、13ペア×2セッションの絵本読み場面を観察。

《「ブックスタート協力家庭の母子相互作用(1)~(4)」の方法》

○研究協力家庭：ブックスタートパイロット地区の東京都杉並区3保健センターで、4ヶ月健診時にブックスタートパックの配布を受け、観察調査への協力を承諾した25家庭(いずれも第1子。男児15家庭、女児10家庭)観察時点での子どもの平均月齢は1歳7ヶ月。これらの家庭は、観察約1ヶ月前に読み聞かせに関する様々な内容項目への質問紙調査に協力してもらい、そこから頻度や開始時期データを得ている。

○相互作用観察方法：A)積み木場面：カメラ撮影になれてもらうこともかねて、子どもにとって新奇なコルク製の積み木を袋から取り出し、母子で自由に遊んでもらう。B)絵本場面：A)が10分ほどたったところで、2冊の絵本「みんなでね」(まついのりこ作絵・偕成社)「チューチューこいぬ」(長新太作・BL出版)を提示し、絵本を読んでもらう。どちらの絵本から読むのか、どのように読むのかはすべて各家庭での自然発生に任せる。実際には、B)の途中でA)に戻るなどのことや他のおもちゃを持ち込む等も生じるが各家庭での自然発生に任せる。

○親への聞き取り面接 半構造化面接法により、観察した相互作用についての親の考えや日頃の様子を尋ねる。

《本観察方法の独自性》

研究目的が異なるため、各方法と本観察方法には差があるが、絵本、母子、相互作用(相互関係)というキーワードが共通し、家庭訪問をして、ビデオ撮影している点は、共通している。実験室や観察室のような家庭以外のところで絵本を介することは、乳幼児にとっては、非日常となり、日常の姿が観察できない。そこで、家庭に絵本を持ち込んで、観察するという方法である。

その結果、乳幼児が、ビデオカメラに興味を示す時期があったり、カメラに特に興味を持つ乳幼児も居たりしたが、観察訪問時間内には必ず、母子で絵本を介する場面が見られ、関与観察者を意識することなく母子で過ごすことが、観察された。また、関与観察者は

透明な存在でなく、その場に関与しながら自然にふるまった結果、乳幼児が関与観察者に関わってきたり、関与観察者に笑いかけたり、という自然な観察が可能となった。

成り込みながら関与観察する本観察方法は、家庭訪問が2~3ヶ月毎であり、母子との親和間が深まり、観察者の訪問に、乳幼児が慣れやすい。実際には、訪問開始すぐに、絵本を介する場面を観察でき、カメラの準備より先に絵本を取り出すシーンも見られた。

また、横断的に各家庭の母子を比較考察するのではなく、縦断的に観察し続けることは、その変化や、過程の考察が可能となる。

本方法は、持参した絵本を1冊・2冊に特定せず、複数冊を持参し、観察中は家庭にあった絵本も取り入れる。この方法は、選べる絵本の数が多く、乳幼児や母親の選択肢が広がり、母親が限定されたものを扱わねばならないという非日常的な意識を持たずに済むと考えられる。

つまり、本観察方法の独自性は、可能な限り自然に、日常、絵本を介している母子の相互関係を観察するために、各家庭にビデオを持ち込み、複数冊の自由選択できる絵本を用意し、継続的に観察したことにあるといえる。

(2) 本方法による実践

本方法での実践研究「絵本を介した母子相互関係の考察—前言語段階の事例研究を通して」では、横断的に記述したエピソード18例、縦断的に記述したエピソード9例を用い、考察・結論付けた。この方法を用い考察することは、個人の発達比較に終わりがちな横断的記述を、縦断的記述で裏付けることにより、発達の流れというものが捉えられる。また、個人の成長記録に終わりがちな縦断的記述を、数例の同月齢の母子を見る横断的記述で裏付けることにより、一方的な視点ではない考察ができる。

このように、縦断的・横断的の2つの方向性から考察することにより、絵本を介した前言語段階の母子相互関係の実態が明らかにできると考える。加えて、考察に使用した18例と9例以外にも、使用されなかった多くのエピソード記述が残る。つまり、その多くの事例の中から、論旨の焦点化が可能な事例を選び、考察することが可能となる。

また、関与観察者が観察の現場に臨床するという本方法は、乳幼児と、母親の両方を見ることができ、その場に関与することによって、その間主観的な流れが

把握できる。

観察後のエピソード記述においては、関与観察者自身がビデオを再生し記述することによって、記述内容の信頼性が高くなるといえる。

次にあげるエピソードは、関与観察者が記述することにより可能となった、母親と乳児二者への視点がある。また、二者の間主観性についても読み取れ、この母子の現在の問題を探る糸口となる。

【エピソード3：絵本を介したH児と母親】

母親は「い・な・い・い・な・い・ばあ」と絵本の題名を二回指差しながら、仰向けのままのH児に向かって読む。「わかった?」と確認する①。「にゃあにゃあが、ほらほら、いないいないばあ」と絵本を動かしながら読むと(「ばあ」の時に子どもの身体に迫る読み方)、H児が手足をバタバタさせて「キヤー」と声を立てる。「ばあ」の時、H児の声の反応があるたびに、母親は「わかった、わかった」と嬉しそうに笑う②。声を立てないときは、「わかった?」③と、確認する。絵本が終了すると、母親はガーゼのハンカチで自分の顔を隠し、「お母さんがいないばあ」と遊び初め、次は、H児の首にかかっていたよだれかけで「H坊も、いないいないばあ」とする。それを矢継ぎ早に、何度か繰り返す。その間中、H児は足をバタバタ、手を動かし、ニコニコと母親の顔を見ている。が、声を立てて笑うわけでない。母親は「あんたは笑わへんなあ」と、つぶやく。

関与観察をして現場に臨席すると、母親が何度も「わかった」(下線①②③)という語尾のトーンでそれぞれのニュアンスがちがうのが聞き取れる。H児が声をあげ、全身の動きがあるときは「そう、よかった」(下線②)というトーン。H児の気が散って、他をみているようなとき、あるいは、声をあげないようなときは「ほんとに通じているの?」(下線①③)と念押しをしているようなトーン。大別すると2種類である。

また、時折、母親の求める反応の連続がH児にあるときは、母親自身のテンションが高まり、母親の声も高くなる。つまり、母親は、乳児の反応の確かな手ごたえを性急に求め、言語で表さないH児の思いの捉え方に、まだ慣れていないと考えられる。実際に関与観察していると、反応の大きいときばかりが、H児の反応とは限らず、最後の実際の遊び(ガーゼハンカチやよだれかけで顔を隠す)に至ったとき、H児は大きな表情の変化が無く、声もあげないが、関与観察者には、H児が決して不快の状態であるとは考え

られない。しかし、H児の大きな反応がないことに母親は満足せず、「あんたは笑わへんなあ」という関わりがうまくいかなかったことを示唆するような母親の呟きが聞こえる。母親の性急な関わり合いに、H児なりの「快」の状態が表出されているのであるが、それは、母親の思いとはズレのあるH児の情緒表出方法である。関与観察者には、H児が母親の情緒的な波長のズレがあることが推測される。関与観察者には、H児が快の状況にあることは、手足をバタバタさせたり、声を上げたり、ニコニコと母親の顔を見ているといった身体の動き、表出で理解できるのにかかわらず、母親は、H児の「快」の状況のすべてを把握できていないのである。

以上の実践研究から判断されるように、前言語段階では、言葉になっていない音や、身体の動きなどから、乳児の情緒表出を捉えなければならない。しかも、その音や動きだけ、取り出してみても、その乳児の思いは理解できるものではない。また、【エピソード3】の母子のように、笑わせようとか、声を出させようとか、張り切る母親と、ゆったりとしているかのように見える乳児との「ズレ」を知るには、ビデオ撮影し記述するだけでなく、関与観察により臨席し、その場の間主観的雰囲気を読む必要があると考える。

つまり、本方法で、その場に臨席して間主観性を捉えることは、特に、前言語段階の母子相互関係を研究していく上で、重要な方法の一つであるといえる。

(3) まとめと課題

ここまで、述べてきたように、本方法で用いた、関与観察、ビデオ撮影、エピソード記述の流れは、前言語段階乳幼児の情緒表出を読み取りやすく、母子間の間主観性を読み取りやすい一つの方法であり、可能な限り自然に、母子が絵本を介する場面の研究に適すると考える。また、本方法においては、母子が絵本を介した環境に成りこんでいく過程を見ることが可能である。

本実践研究によると、母親は関与観察開始時期(4ヶ月前後)から、絵本を使って、乳児の関心をひこうとし、乳児に関心がないと母親が判断した場合は、他の事や他の絵本で、調整する実態が観察された。また、観察依頼者の依頼(「赤ちゃんと一緒に見たい(読んであげたい)絵本をどうぞ。」と口頭依頼)に応じる形で、絵本を介した観察時間は開始され、観察中は、読んであげようとする母親を観察できた。また、

乳児が嫌がる場合は、読むのを調整したり、乳児が開閉に興味を示す場合には、乳児の要求に応えたり、開閉を手伝う母親の実態が観察された。

しかし、ここで、絵本を介するという新しい環境に、母子がどう成り込み始めるかという課題が浮かび上がってきた。

まず、前言語段階の乳幼児の場合は、自我の確立が未発達であり、母親との絵本を介した新しい環境に、自然に、成り込めると考えられる。また、それは、発声や動き等、乳幼児の行動で判断が可能である。

しかしながら、自我の確立されている母親自身が絵本を介した新しい環境にどう成り込み始めるかという点については、関与観察のみでは、判断しにくい。つまり、観察依頼に応じる立場だけなのか、母親自身の主観で成り込んでいく立場なのか。等、絵本を介する環境へ成り込む母親の動機付けである。また、観察を重ねると、その動機に変化や差異があるのか。またそれはどこから生じるのか。

絵本を介した環境への母親の動機付けを理解することは、絵本を介した母子相互関係の過程を理解する上で重要であり、絵本を介した日常の母親の主観を理解することであると考える。

したがって、母親が乳幼児と絵本を介する動機付けを検証できるような方法を準備し「絵本を介した前言語段階の母子相互関係の過程」の検証をさらに進めることが課題である。

注

- 1) ここで言う主体 (subject) は、認識し行為し評価する私の意味。
- 2) ここで言う主観 (subjectivity) は、認識主観の意味。
- 3) 【用意した絵本書誌】
安西水丸 (1987) 『がたんごとん がたんごとん』福音館
Bland, Steve (1999) 『Woof!』Campbell Books
ブルーナ, ディック (1984) 『たべもの』講談社
ブルーナ, ディック (1994) 『ボールをぼーん』講談社
ブルーナ, ディック (2002) 『おやすみなさい』講談社
カール, エリック (1997) 『はらぺこあおむし』もりひさし (訳) 偕成社・ボードブック
カズンズ, ルーシー (1993) 『はたけのまわりで (ふかふかえほん)』偕成社
こかぜさち (2001) 『ぶーぶーぶー』わきさかかつじ (絵) 福音館
小森 厚 (1977) 『どうぶつのおかあさん』藪内正幸 (絵) 福音館

- 平山和子 (1979) 『くだもの』福音館
Lousada, Sandra (2001) 『This Little baby』Campbell Books
Lodge, Jo (2001) 『Pets』Campbell Books
松谷みよ子 (1967) 『いないいないばあ』瀬川康男 (絵) 童心社
元永定正 (1982) 『ころころころ』福音館
パール, トッド (2001) 『おおきいちいさい』ほむらひろし (訳) フレーベル館
スカール, グレース (1986) 『いぬがいっぱい』やぶきみちこ (訳) 福音館
スカール, グレース (1986) 『ねこがいっぱい』やぶきみちこ (訳) 福音館
Stephens, Helen (2002) 『Twinkly night』Campbell Books
たるいしまこ (2001) 『おおきなあかいらんご』福音館
4) 安西水丸 (1987) 『がたんごとん がたんごとん』福音館
5) パール, トッド (2001) 『おおきいちいさい』ほむらひろし (訳) フレーベル館
6) 松谷みよ子 (1967) 『いないいないばあ』瀬川康男 (絵) 童心社

引用文献・参考文献

- 秋田喜代美・横山真喜子・森田洋子・菅井洋子 2003
ブックスタート協力家庭の母子相互作用 絵本への媒介者としての母親のガイダンス 日本発達心理学会第14回大会発表論文集 pp. 241
Bowlby, J 1969 Attachment and loss Vol 1 愛着行動 黒田実郎他訳 1976 岩崎学術出版社
Emde, R. N. 2000 Development and Affect 発達と情動 (北山ユリ訳) 精神分析研究 44(1) pp. 7-16
Emde, R. N., Sorce, J. F. 1983 The Rewards of Infancy: Emotional Availability and Maternal Refaerencing, 乳幼児からの報酬: 情緒応答性と母親参照機能 (生田憲正訳・慶応乳幼児精神医学研究グループ訳・小此木啓吾監修) 1988 乳幼児精神医学 岩崎学術出版社 pp. 25-47
Erikson, Erik H. 1964 Insight and responsibility: lectures on the ethical implications of psychoanalytic insight: W. W. Norton, 洞察と責任 鐘幹八郎訳 1971 誠信書房 pp. 238
Klaus, M. H., Kennell, J. H. 1982 Parent-Infant Bonding 親と子のきずな 竹内 徹, 柏木哲夫, 横尾京子訳 1985 医学書院
鯨岡 峻 1986 a 心理の現象学 世界書院
鯨岡 峻 1986 c 母子関係と主観性の問題 心理学評論 Vol 29 No 4 pp. 507
鯨岡 峻 1993 a 初期母子コミュニケーションの発達とその構造 平成2~3年度文部省科学研究費補助金 (一般研究 B 研究成果報告書) pp. 1-93
鯨岡 峻 1993 b 発達研究の現在-関係発達論への転回- 児童心理学の進歩 1993年版 金子書房 pp. 11
鯨岡 峻 1997 原初的コミュニケーションの諸相 ミネルヴァ書房 pp. 103

- 鯨岡 峻 1998 両義性の発達心理学 ミネルヴァ書房
- 鯨岡 峻 1999 a 原初的コミュニケーションとその〈発達〉 教育と医学 (教育と医学の会 慶応通信) 47(4) pp. 284-292
- 鯨岡 峻 1999 b 初期〈子ども-養育者〉関係研究におけるエピソード記述の諸問題 心理学評論 (心理学評論刊行会) 42(1) pp. 1-22
- 鯨岡 峻 1999 c 関係発達論の展開-初期〈子ども-養育者〉関係の発達の変容- ミネルヴァ書房
- 鯨岡 峻 1999 d 関係発達論の構築 (間主観的アプローチによる) ミネルヴァ書房
- 森田洋子・秋田喜代美・横山真喜子・菅井洋子 2003 ブックスタート協力家庭の母子相互作用 子どもの注意中断に対する母親の対応 日本発達心理学会第14回大会発表論文集 pp. 243
- 大村彰道・荻野美佐子・遠藤利彦・針生悦子・石川有紀子・白佐いずみ 1989 絵本読み場面における母子相互作用 (第一報) 安田生命社会事業団研究助成論文集 25 pp. 24-33
- 大村彰道・荻野美佐子・遠藤利彦・針生悦子 1990 絵本読み場面における母子相互作用 (第二報) 安田生命社会事業団研究助成論文集 26 pp. 17-25
- 櫻井美佐子 2003 絵本を介した母子相互関係の考察-前言語段階の事例研究を通して 甲南女子大学修士論文
- 菅井洋子・秋田喜代美・横山真喜子・森田洋子 2003 ブックスタート協力家庭の母子相互作用 母と子をつなぐ媒介手段としての指さし 日本発達心理学会第14回大会発表論文集 pp. 244
- Stern, D. N. 1985 The interpersonal world of the infant: a view from psychoanalysis and developmental psychology 小此木啓吾・丸田俊彦・神庭靖子・神庭重信 (訳) 1989 乳児の対人世界 (理論編) 岩崎学術出版社
- Sullivan, H. S. 1953 Conceptions of modern psychiatry 中井久夫・山口 隆 (訳) 1976 現代精神医学の概念 みすず書房 pp. 21
- Trevarthen, C. 1979 Communication and cooperation in infancy: A description of primary intersubjectivity In M. M. Bullock (Ed.), The before speech: The beginning of interpersonal communication. : Cambridge University Press. 早期乳児期における母子間コミュニケーションと協応: 第一次相互主体性について 鯨岡 峻・和子 (編訳) 1989 母と子のあいだ pp. 101 ミネルヴァ書房
- Trevarthen, C. Hubley, P. 1978 Secondary intersubjectivity: confidence, confiding and acts of meaning in the first year Ibid. Academic Press Inc 第二次相互主体性の成り立ち 鯨岡 峻・和子 (編訳) (1989) 母と子のあいだ ミネルヴァ書房
- 横山真喜子・秋田喜代美・森田洋子・菅井洋子 2003 ブックスタート協力家庭の母子相互作用 母親が言葉で伝える絵本場面の特徵 日本発達心理学会第14回大会発表論文集 pp. 242